近代土木遺産としての余部鉄橋の保存と活用の取り組み

Practical Approach to Preservation and Reuse of Amarube Railway Bridge as Civil Engineering Heritage

福永悦男[***]、柳澤友樹[****]、藤原博文[*****]、川崎雅史[******]、岡田昌彰[*******]

By Etsuo FUKUNAGA, Tomoki YANAGISAWA, Hirofumi FUJIWARA, Masashi KAWASAKI, Masaaki OKADA

概　要

兵庫県北部にあるＪＲ山陰本線の余部鉄橋は、近代土木遺産のＡランクに位置づけられているが、現在は、安全性・定時性の確保のために新橋梁への架替工事が着々と進められており、現鉄橋は平成 22 年秋には鉄道橋としての役割を終えようとしている。そこで、近代土木遺産の価値を後世に継承する取り組みとして、現鉄橋の一部を現地保存する一方、新橋梁の建設に伴い現鉄橋から撤去せざるを得ない部材についても歴史が凝縮されているとし、撤去する部材をオブジェやグッズとして活用し、余部鉄橋の価値を後世に継承することとしている。本稿では、撤去する部材の活用策の検討に当たりアイデアコンペに取り組んだ事例を中心に紹介する。

1．はじめに

余部鉄橋はＪＲ山陰本線鎧駅～餘部駅間（兵庫県美方郡香美町香住区余部）に位置し、明治 45(1912)年に当時の橋梁技術を結集し建設された、国内随一（長さ 310.70m、高さ 41.45m）の鋼トレッスル式橋梁である。

建設以来、約 100 年もの間、鉄道橋として山陰本線の運行を支えてきたが、昭和 61 年 12 月の列車転落事故発生以降、列車運行の安全性確保のために風速規制が強化された結果、定時性が確保されない状況となり、現在は、安全性・定時性の確保のために新橋梁への架替工事が進められている。平成 22 年秋には新橋梁（コンクリート橋）が完成予定であり、それと同時に現余部鉄橋は鉄道橋としての役割を終えることとなる。

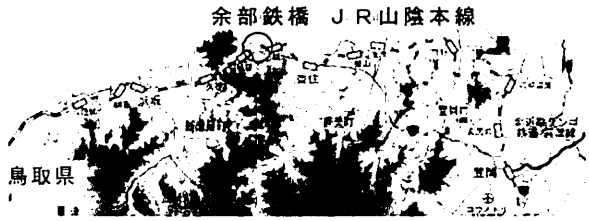
しかし、訪れた人の誰もが圧倒される規模と特徴的な鋼トレッスル式の大橋脚、山陰海岸の豊かな自然と但馬地域の原風景が残る余部の集落とが重ね合わさったダイナミックな景観は、住民から愛され、そして但馬地域の貴重な観光資源として訪れる多くの人に親しまれてきた。またＡランクの近代土木遺産として高い評価を受けていることから、現鉄橋の保存を求める多くの声が寄せられるようになった。

更に、余部鉄橋利活用検討会から「余部鉄橋の姿とそれを取り巻く人々の営みの中に、多くの教訓を見出すことができ、それらを後世へのメッセージとして残すことが重要である」との提言を受け、兵庫県では“余部鉄橋の継承”を行うこととした。

その手段として、鉄橋の一部を現地保存するとともに、撤去される鋼材についても歴史が凝縮されているとし、その活用方策を検討した。本稿では、余部鉄橋から撤去される鋼材を活用する取り組みを中心に紹介する。

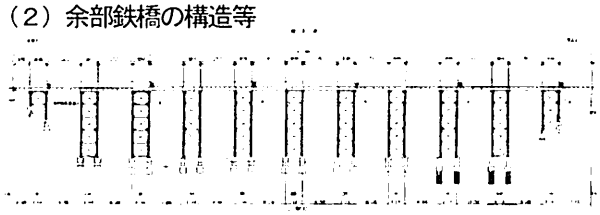
2．余部鉄橋の概要

（1）余部鉄橋の位置



図－ 1　余部鉄橋位置図

（2）余部鉄橋の構造等

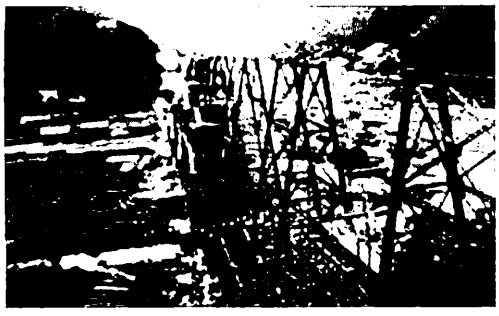


図－ 2　余部鉄橋の構造図

写真－ 1　余部鉄橋（H19.3 架替工事着手前に撮影）

* keyword：余部鉄橋、近代土木遺産、アイデアコンペ

** 非会員　兵庫県県土整備部交通政策課 主査
*** 非会員　兵庫県新温泉土木事務所 職員
**** 非会員　兵庫県美方郡香美町企画課 課長補佐
***** 正会員　工博 京都大学大学院 教授
****** 正会員　博士(工学) 近畿大学理工学部 准教授



写真－２　余部鉄橋建設時の状況(明治44年9月ごろ)

余部鉄橋の概要を以下に示す。

・橋梁形式　：鋼トレッスル式橋脚
・橋台面間長：309.42m
・高さ　　：41.45m(長谷川河床からレール面まで)
・工事着手　：明治42(1909)年12月16日
・工事完成　：明治45(1912)年1月13日
・鋼材重量　：1,010t
・総工事費　：331,536円(当時)

３．余部鉄橋の保存と再出発に向けて

（１）新橋梁への架替えと余部鉄橋の保存要請

１）定時性確保に向けた新橋梁への架替えの判断

昭和61年の列車転落事故発生以降、列車運行の風速規制が強化（25m/s→20m/s）され、定時性の低下が深刻化するとともに、安全に対する不安は解消されないまま今日に至っている。

平成3年から、JR山陰本線の定時運行を確保するため、余部鉄橋対策協議会等の検討機関を立ち上げ、11年まで検討を重ねたが、平成13年、JR西日本の提案を踏まえ、余部鉄橋対策協議会において、「現鉄橋への定時性確保のための防風壁設置は困難であり新橋梁への架替えで取り組む」方針が決議された。

２）現余部鉄橋の保存要請

新橋梁の形式選定のため、平成14年に余部鉄橋定時性確保対策のための新橋梁検討会が設置された。翌年の平成15年には、「新橋梁の形式はＰＣラーメン橋が適切である」と同時に、「現橋梁の今後の取り扱いについても、慎重な検討を行うことを望む」との提言が兵庫県知事へ提出された。

また、平成15年5月には（社）土木学会土木史研究委員会から余部鉄橋対策協議会会長である兵庫県知事に対し、「余部橋梁の保全的活用に関する要請」が提出された。

そこで、平成18年3月、学識者、関係自治体及び地元住民等で構成される「余部鉄橋利活用検討会」を設置し、望ましい現橋梁の残し方や利活用方策について検討を行うこととした。

（２）余部鉄橋の保存と再出発に向けた提言

１）余部鉄橋利活用検討会での検討

平成18年3月に立ち上げた余部鉄橋利活用検討会では、余部鉄橋が長い歴史の中で地域の人々の生活に与えてきた地域資産としてのアイデンティティがどこにあるかを見極めるために、近代土木遺産としての価値、地域振興の観点から景観資源・観光資源としての価値を検証し、望ましい現橋の残し方や活用方策について検討を行った。

検討に際しては、「後世に余部鉄橋の何を伝えるか？」を出発点とし、地域住民の生活や周辺景観との調和、継続的な維持管理性、利活用の発展性等について意見交換を重ねた。

２）余部鉄橋利活用検討会からの提言

平成19年3月に「余部鉄橋の保存と再出発に向けた提言」がとりまとめられ、『鉄橋から始まる多彩な交流と余部の元気あふれる地域づくりに向けて』を基本理念とし、安全・安心の確保を利活用の前提条件とした基本方針が示された。

①将来にわたる安全・安心の確保
②余部鉄橋への新たな使命の付与と記録保存・情報発信・交流拠点の整備
③住民が主体となった地域づくりへの展開
④近代土木遺産の保存・活用に関する議論の活性化を期待
⑤多様な主体が支える長期的な取り組みが必要

更に、長期的な取り組みとして、次のことが謳われている。

・現位置より撤去する部材について利活用方策の検討を行う。
・アピールの主体の立ち上げを行うとともに、アピール方法の工夫を検討する。
・余部鉄橋の再出発に対して、様々な議論が展開されるよう情報発信を行う。

３）“余部鉄橋の継承”に向けて

この提言を踏まえ、兵庫県では「鉄橋の一部を現地に保存」と「撤去される鋼材の活用」に取り組むこととした。そこで、平成21年3月、鉄橋の一部を現地に保存することを目的に「余部鉄橋利活用基本計画」を策定した。整備内容を図－３に示す。また、撤去される鋼材の活用を目的として、平成20年8月から「余部鉄橋の鋼材の活用に向けたアイデアコンペ（以下、「アイデアコンペ」と言う。）」を実施した。

4章では「鉄橋の一部を現地に保存」について述べ、5章－6章で「撤去される鋼材の利活用」について述べる。

４．現余部鉄橋の一部の現地保存

（１）余部鉄橋利活用基本計画の策定

平成21年3月に策定した「余部鉄橋利活用基本計画」では、整備の基本方針を『新たな施設整備は必要最小限とし、余部地域のそのままの姿と人々のふれ合いを通じて、余部鉄橋の物語を継承し地域の活性化をめざす』と定め、主な施設の整備内容を決定した。

（２）主な施設の整備内容と目的

①鉄橋の一部を現地で保存し「鉄橋展望台」として活用

余部鉄橋の継承を目的とし、安全・安心の確保を前提に、現鉄橋の一部(3 橋脚 3 スパン)を現地に保存し、本物(Reality)だけが持つ存在感・スケール感の継承を行う。

また、保存した鉄橋には展望施設として新たな使命を与え、鉄橋に触れる本物体験とダイナミックな風景を体感する視点場として活用する。

②歴史と教訓を伝える「鉄橋記念施設」を整備

余部鉄橋の継承として、現鉄橋の一部保存のほか、余部鉄橋の100年間の記録と記憶を伝える鉄橋記念施設の整備を行い、余部鉄橋を守り育てた先人の技術・努力・苦労と人々の思い出を通して、余部鉄橋から得た数々の教訓を後世に継承する。

③「道の駅（地域振興施設）」の整備

余部地域の活性化のため、駅・鉄橋・まちをつなげる一体的な地域整備を行うと共に、地域住民や来訪者が集い・賑わう場をつくるため、地域固有の「食」の提供を中心とした地域振興施設の整備を行う。

④「道の駅（情報発信施設等）」の整備

余部鉄橋の第二の人生や余部地域の魅力を情報発信すると共に、「日本風景街道 但馬漁火ライン（国道178号）」の一つの拠点として広域的なツーリズムの促進を図るため、地域情報・道路情報発信施設及び休憩施設の整備を行う。

5．近代土木遺産の撤去される鋼材の活用に向けて

（1）撤去される鋼材を活用した新たな取り組み

1）撤去される鋼材の活用に向けて

余部鉄橋の継承を考えていく上で、4章で述べたとおり現鉄橋の一部の現地保存が考えられているが、撤去される部材にも100年もの間雨風にさらされた証である腐食跡、塗装跡、補強工事跡、アメリカからはるばる運ばれてきた証であるペンコイド社の刻印など余部鉄橋の歴史が凝縮されており、その撤去部材は近代土木遺産である余部鉄橋の価値を幅広く共有できるものであると判断した。

そこで、余部鉄橋の継承、余部地域の活性化、幅広い情報発信を目的に、現地から撤去する鋼材の活用方策の検討を行うこととした。

2）アイデアコンペの採用理由

撤去鋼材の活用方策の検討が余部鉄橋の再出発に向けた最初の事業として、また、地域住民をはじめ余部鉄橋に関わりのある人々の思いを伝えていく取り組みでなければならないと考えた。そこで、検討の手法として以下の理由からアイデアコンペを採用した。

a）採用理由

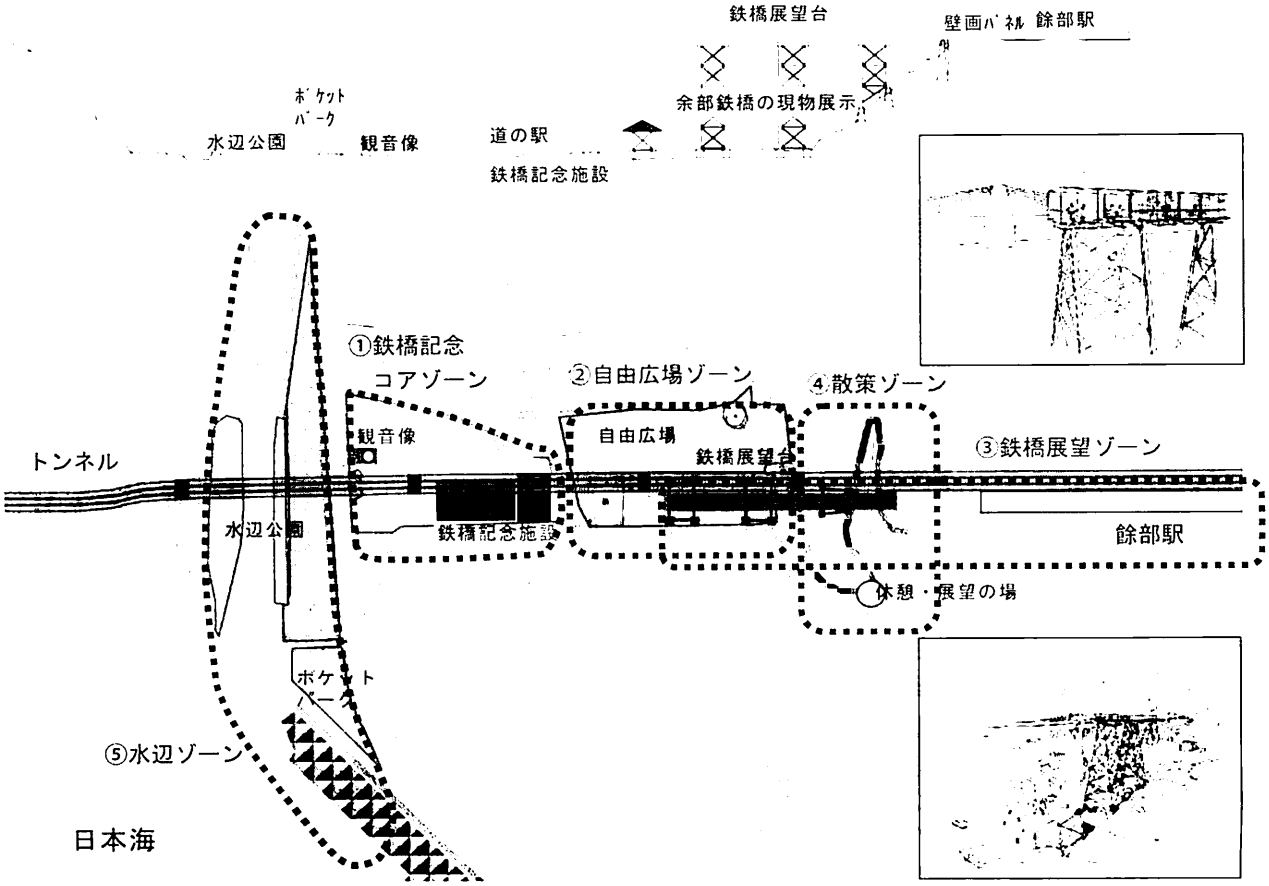
・幅広いアイデアを募集することができる。
・余部鉄橋の再出発を広報することができる。
・多くの人と共に余部鉄橋の後世への継承を考えることができる。

b）アイデアコンペに期待する効果

・余部鉄橋の再出発に向けた取り組みの円滑な始動
・近代土木遺産の保存や活用に関する議論の活性化
・但馬地域の振興を促進

（2）アイデアコンペの基本方針

アイデアコンペの企画について、基本方針を次に示す。



図－3　余部鉄橋利活用基本計画で示された計画平面図

①幅広く周知する。（多くの人に知ってもらう。）
・対象は日本国内。
・インターネットを最大限活用した広報。
・県や町による記者発表、広報媒体を利用。
②多数の応募を集める。（多くのアイデアを集める。）
・応募手続きの簡素化。
・コンペ後の入選アイデアの取り扱いの明確化。
・副賞の設定。
③公平性確保
・審査のプロセスを可能な限り公開し透明性を確保。
・審査の視点を事前に公表。
・多くの審査員による審査を実施。

（3）アイデアコンペの応募方法

1）アイデアの募集区分

募集するアイデアは余部鉄橋の歴史の重み、ダイナミックさ、景観などを後世に伝えていけるものとし、求めるべき撤去部材の利活用のアイデアの区分として次の 3 つとした。

①部材再利用の部（オブジェ部門）
余部鉄橋の形は変わるが、モニュメントとして余部鉄橋を継承するアイデア。

②部材再利用の部（グッズ部門）
余部鉄橋の一部を個人所有として、余部鉄橋を継承していくアイデア。

③展示・保存、研究の部（展示・保存部門、研究部門）
撤去部材そのものを展示・保存や研究をして、余部鉄橋の継承をしていくアイデア。

2）応募資格

募集に関しては、幅広くアイデアを集めるという考えから、特に年齢制限は設けず、余部鉄橋の保存と活用の取り組みは長期間をかけてその価値が築かれていくことに着目し、次世代を担う年少者でも気軽に応募できるようにした。

6．アイデアコンペの開催

（1）応募状況

1）専用ホームページのアクセス数

平成20年9月1日からアイデアコンペの事前告知を行い、9月16日ー10月24日でアイデアの募集を行った。

9月1日から専用ホームページを立ち上げた結果、応募終了日までにアクセス件数は約3,500件あった。特に事前告知期間と応募開始の最初の1週間でのアクセスが多かった。これは、各応募サイトへの掲載開始がこの期間に集中していたためで、サイトを見て、本アイデアコンペのホームページにアクセスしたものと考えられる。

2）部門ごとの応募数

応募総数が全部門で169件あり、各部門毎の応募数の内訳は表－1のとおりである。「部材再利用の部」への応募が集中し、賞の対象外である「展示・保存、研究の部」については応募数が少ない結果となった。

しかし、約1ヶ月の応募期間（事前告知約2週間）で169作品の応募数については、他の賞金付きのコンペと比べても、多くのアイデアを集めることができたと考える。それだけ、余部鉄橋への人々の関心が強いものと思われる。

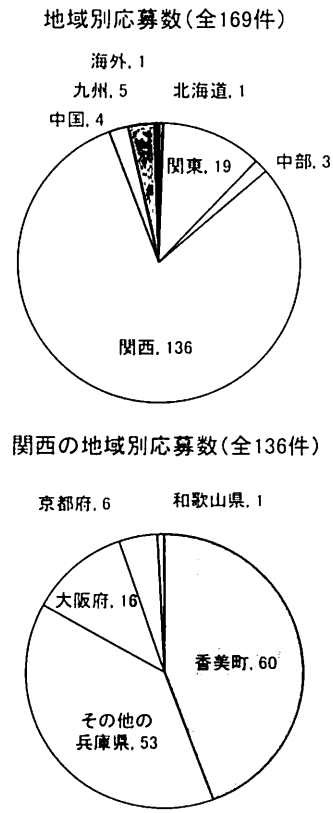
表－1　各部門の応募数の内訳

募集区分		応募数
部材再利用の部	オブジェ部門	105
	グッズ部門	49
展示・保存、研究の部	展示・保存部門	13
	研究部門	2
合　計		169

3）地域別の応募数

地域別応募数及び関西の地区別応募数を図－4に示している。応募は、北は北海道札幌市、南は長崎県西彼杵郡と日本全国からの応募があった他、海外（アメリカ）からの応募もあり、幅広い地域からの応募作品が集まったと言える。これはインターネットを活用した広報の効果がこのような形で現れていると考えられる。

また、関西地区からの応募は、全体169件の内136件あり約80%を占める。その中でも、地元香美町からの応募が60件あり44%を占める。



図－4　地域別応募数

今回の広報は、県・香美町による記者発表、ポスターの掲示、チラシの配布、雑誌への掲載、インターネットによる応募サイトを活用した。ポスターの掲示・チラシの配布については、但馬地域を中心に、兵庫県内の主要箇所で実施した。

但馬地域以外の応募者がインターネットから情報を得

たものとすれば、応募総数169件のうち、但馬地域以外の応募が87件であり、約半数がそれに該当するものと推測される。これは、雑誌（8誌）の掲載やインターネットによる応募サイト（28サイト）での幅広くアイデアコンペを広報した結果である。

（2）審査の考え方

1）審査対象

審査対象は、オブジェ部門及びグッズ部門とし、展示保存部門及び研究部門は審査を行わなかった。

2）審査方法

審査方法は、一次審査と二次審査の2段階で行い、一次審査通過者のみに香美町に来て頂き、二次審査を受けていただくこととした。

一次審査は学識者2名による企画書のみの書類審査とし、二次審査は審査員20名による企画書の書類審査と3分程度のプレゼンテーション審査とした。

3）審査の透明性の確保

審査の透明性を保つため、表－2に示した20項目の評価視点・評価指標で審査することを、事前に応募者に示した。

表－2　評価視点及び評価指標

評価視点	評価指標
継　承	形態、価値、思い、風景、歴史・文化
実　現	可能性、使用性、耐久性、維持管理性、製作性
地域振興	観光活用性、PR性、持続性、交流性、供用性
企　画	独創性、ユニーク性、話題性、印象性、提案性

（3）採点方法

1）一次審査

一次審査については、企画書の審査方法を単純かつ明確にすることを目的に、表－2で示した評価指標について、該当するものにチェックする採点方法をとった。採点方法は表－3に示すとおりとした。

表－3　採点方法

記入	点数	点数の考え方
◎	2点	該当し優れている
○	1点	該当する
無記入	0点	該当しない

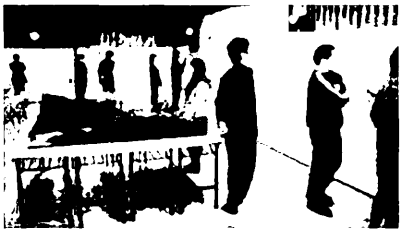
2）二次審査（プレゼンテーション審査）

コンペの審査は非公開で行われるのが一般的であるが、本アイデアコンペでは「余部鉄橋の再活発に向けた取り組みの円滑な始動・近代土木遺産の保存や活用に関する議論の活性化・但馬地域の振興の促進」の効果を期待し、当日のプレゼンテーションを他の発表者や来場者も聴けるように公開で行うこととした。

このため、審査の公平性を図る必要があると判断し、発表順をくじ引きで決定することや、他のアイデアの批判の禁止や当日の追加資料の提示の禁止等を示した「発表者への注意事項」を配布することとした。

3）応募作品の公開

二次審査会場では、応募された全てのアイデアを公開した。会場に全アイデアを展示することで、展示されたアイデアの前で来場された方が余部鉄橋の保存・利活用について議論をするきっかけをつくることもできると判断したからである。



写真－3　展示された全作品をみる来場者

（4）審査結果

1）オブジェ部門の審査結果と評価の傾向

a）審査結果の概括

オブジェ部門に入賞した6つのアイデアと採点結果を図－5に示す。

採点の傾向を見ると、「継承」・「地域振興」・「実現」の評価が高いアイデアが多いが、逆に「企画」では低い評価となっている。また、「継承」と「実現」の両方の評価が高いアイデアはほとんど見られず、どちらかが高い評価だともう一方は低い評価になっている。

審査で重視されたポイントは表－4のとおりである。

表－4　オブジェ部門の審査で重要視されたポイント

評価視点	重要視されたポイント
継　承	建築基準法の課題の有無
実　現	大規模な工事でないこと、再加工の必要性が少ないもの
地域振興	観光への活用が期待できるか
企　画	子供が喜ぶか、ニュース性があるか

b）個別の評価

最優秀賞に選定された「No．35　展望台」の採点結果を見ると、4つの評価視点のうち、「継承」・「地域振興」・「企画」で最高点であったが、実現性は7番目であった。

優秀賞に選定された「No．50　空あかり」は街灯のアイデアであり、「実現」・「企画」で評価が高かった。

2）グッズ部門の審査結果と評価の傾向

a）審査結果の概括

グッズ部門に入賞した6つのアイデアと採点結果を図－6に示す。

アイデアの採点傾向を見ると、オブジェ部門より「実現」に採点の重点を置いていることが伺える。また、全般的に「継承」の評価は低いものとなった。

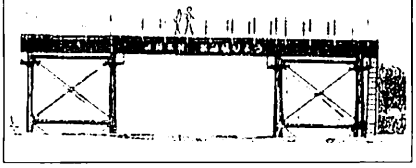
審査で重視されたポイントは表－5のとおりである。

表－5　グッズ部門の審査で重要視されたポイント

評価視点	重要視されたポイント
継承	グッズそのものが継承としての要素は低い
実現	加工の容易さ
地域振興	長く保存できるもの
企画	売れるもの

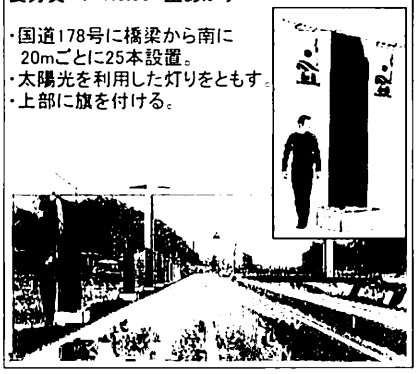
最優秀賞 ： No.35 展望台

・橋脚1段目と桁をそのまま使い展望台とする。
・安全性を確保し、桁を歩けるようにする。
・香美町のしおかぜ香苑に設置する。



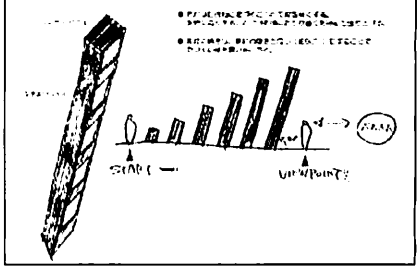
優秀賞 ： No.50 空あかり

・国道178号に橋梁から南に20mごとに25本設置。
・太陽光を利用した灯りをともす。
・上部に旗を付ける。



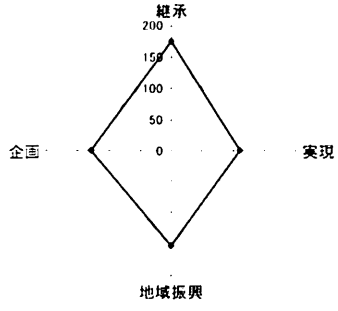
地域振興賞 ： No.61 鉄橋部材の道しるべ

・新橋梁を眺めるポイントまで主桁をならべる。
・目的地に近づくほど部材を大きくする。
・部材を主桁の傾きと同じ約80度に傾ける。



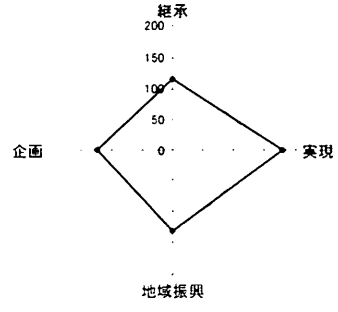
最優秀賞

No. 35 展望台



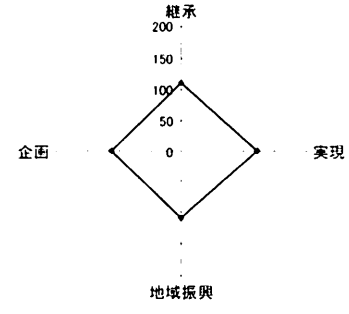
優秀賞

No. 50 空あかり



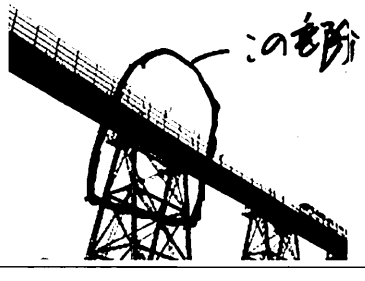
地域振興賞

No. 61 鉄橋部材の道しるべ



地域振興賞 ： No.24 案内塔

・橋脚1段目と桁をそのまま使い案内塔にする。
・余部地区の出入り口に2カ所設置する。
・道の駅の案内に使う。

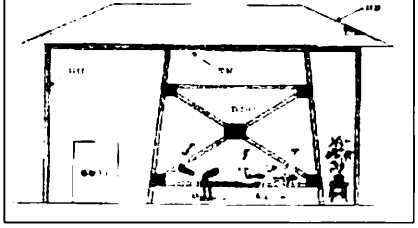


特別賞 ： No.1 大きなブランコ

・高さ6mの大きなブランコを5基設置する。
・人が集まる場所に設置。

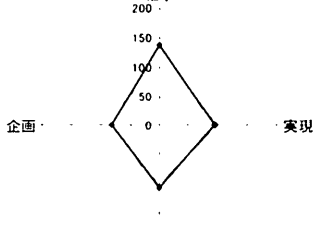
特別賞 ： No.73 建築物の構造材

・構造材として利用できない場合は飾り材とする。
・インテリアのポイントとする。



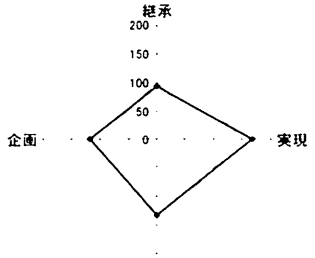
地域振興賞

No. 24 案内塔



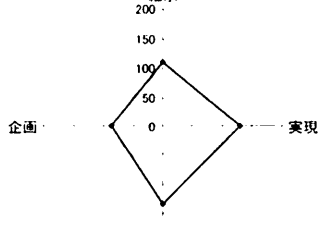
特別賞

No. 1 大きなブランコ



特別賞

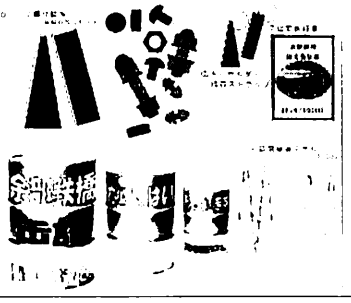
No. 73 建築物の構造材



図－５ オブジェ部門の入賞作品及び採点結果

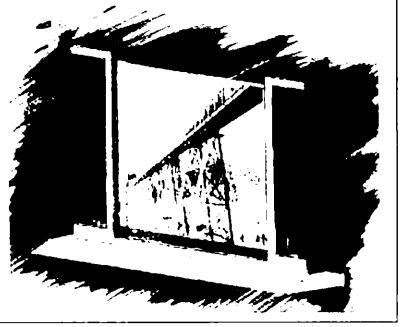
最優秀賞 ： N0.9 未来への橋渡し

・ビスやボルトを缶詰にする。
・鉄橋の歴史のデータや保証書・認定書を入れる。



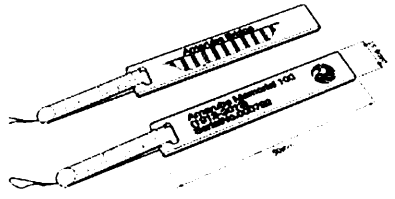
優秀賞 ： No.26 フォトスタンド

・主部材を2～3cmの厚さのスタンドとする。



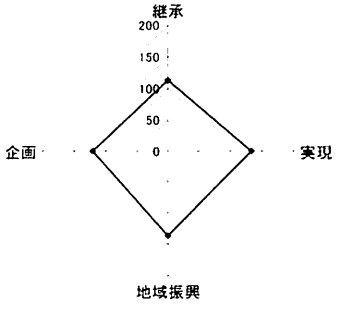
地域振興賞 ： No.19 ストラップ

・限定シリアルナンバー付きのストラップ。



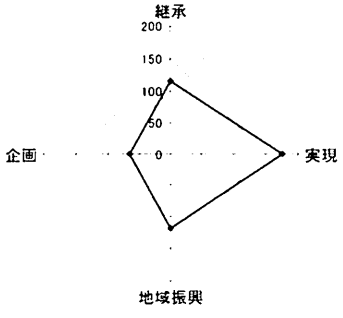
最優秀賞

No. 9 未来への橋渡し



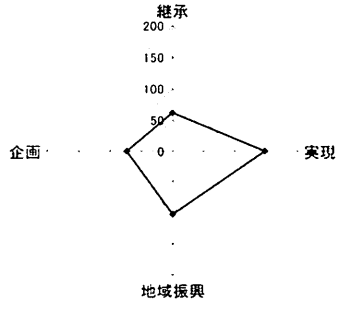
優秀賞

No. 26 フォトスタンド



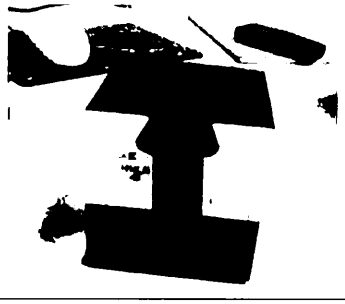
地域振興賞

No. 19 ストラップ



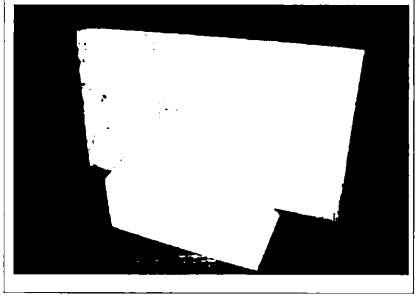
地域振興賞 ： No.34 リベットの置物

・リベットをアクリル等で包み込んだ置物。
・文鎮の代わりにもなる。



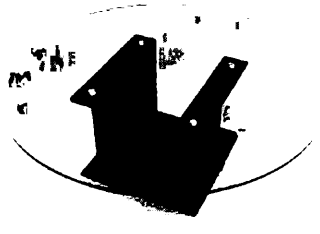
特別賞 ： No.7 ペンコイドプレート

・ペンコイド社の刻印を部分を切り出したプレート



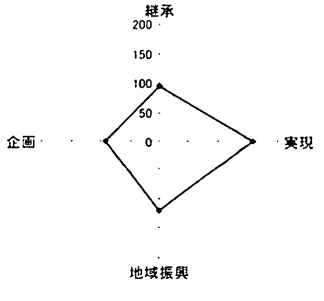
特別賞 ： No.33 応接テーブル

・主部材を用いた円形の応接テーブル。



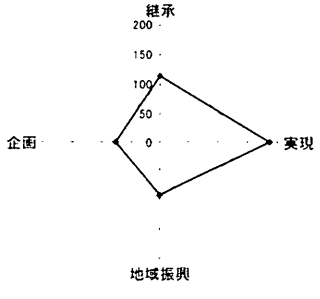
地域振興賞

No. 34 リベットの置物



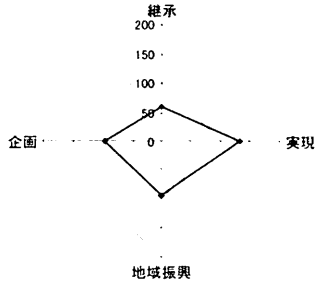
特別賞

No. 7 ペンコイド プレート



特別賞

No. 33 応接テーブル



図－６ グッズ部門の入賞作品及び採点結果

b）個別の評価

最優秀賞に選定された「No．9　未来への橋渡し（缶詰）」は「継承」・「地域振興」・「企画」で高い評価であり、大切に長く保存してもらえる、グッズとして売れるという意見が多かった。

優秀賞に選定された「No．26　フォトスタンド」は、「継承」・「実現」で高い評価であった。

フォトスタンドやブックエンドの作品が合わせて4つのアイデアがあったが、「継承」という評価指標で明暗が分かれた結果であった。

（5）二次審査を公開で行った効果

二次審査を公開で行った結果、一般傍聴者や報道関係の方にアイデアコンペの取組みを大いにPRできたものと考える。また、発表者のプレゼンテーションを行う事により、企画書だけでは読み取れない発表者の余部鉄橋への思いが、審査員だけでなく他の来場者にも十分伝わり、審査会というよりも余部鉄橋の価値を再認識する有意義な発表の場になった。

（6）撤去鋼材を活用したアイデアコンペを終えて

1）応募された全169作品から感じたこと

a）オブジェ部門

・鉄橋のスケール感の継承を目指したものが多かった。
・「余部鉄橋の部材を活用している」と一目で判断できる素材を活かしたシンプルなアイデアが多かった。

b）グッズ部門

・通常では実現することができない近代土木遺産（土木構造物の一部）を「自分の身近に置きたい」「一部でも所持したい」との思いに基づくアイデアが多かった。
・リベット、主部材の形など余部鉄橋の特徴を生かしたアイデアが多かった。

c）共通

・100年間、余部の谷に静かにたたずみながら微動だにせず鉄道橋としての役割を果たしてきた余部鉄橋を象徴する「静」をイメージしたアイデアが多かった。

2）アイデアコンペで得た知見

今回のアイデアコンペの取り組みを通じて、「近代土木遺産から撤去される部材の活用」をテーマに、近代土木遺産の価値や人々の思いについての議論をすることができ、以下の知見を得たと考える。

①撤去鋼材にも余部鉄橋の歴史等が凝縮している。
②他業種や多世代の方々と余部鉄橋の価値について再び議論が活性化した。
③撤去される近代土木遺産の存在感が再認識された。

3）アイデアコンペを通じて感じたこと

プレゼンテーションを聞いている限り、100年間の使命を果たした橋梁部材を再利用することに意義を感じた方が多かったように思う。

今回のアイデコンペの開催が、余部鉄橋の保存・利活用の議論の場となり、広い視点で見れば、近代土木遺産の保存・活用に際し、その構造物が現地から撤去・解体されても、近代土木遺産の「価値」や「人々の思い」を継承する一つの手法を試すことができたと考える。

4）これからの課題

a）撤去鋼材の活用アイデアの実現

今回のアイデアコンペの取組みにより、多くの方々と余部鉄橋の持つ価値等を再び共有することができた。しかし、撤去鋼材の活用を通じ、余部鉄橋の価値を「後世に」継承するためには、今回集められたアイデアを実現して行くことが必要である。実現にあたっては、アイデアの実現可能性の検討として、構造の照査、法制度への適合、設置場所・販売場所の検討、所有権の対応等、様々な課題を解消していく必要がある。

b）余部鉄橋の保存・活用の継続的な取組みと情報発信

後世に余部鉄橋を継承するためには、余部鉄橋の保存と活用という取組みを継続する必要がある。

また、今回のアイデアコンペでは、日本全国の皆さんから応募があったように、余部鉄橋の保存と活用は、多くの方々に注目されている。余部鉄橋の継承の取組みは、非常にローカルな取組みではあるが、物理的な制約と社会的な要請により、その役目を終え、一部撤去されることとなった近代土木遺産の保存と活用の一事例として、情報発信していく必要がある。

7．おわりに

兵庫県では、近代土木遺産である余部鉄橋の継承の取り組みとして、「鉄橋の一部を現地に保存」と「撤去される鋼材の利活用」に取り組んでいる。

その中でも、撤去される鋼材の活用を検討していること、その検討の手法としてアイデアコンペを行ったことを日本全国に発信することで、全国にある近代土木遺産の保存を考える際に、今回のこの余部鉄橋の取り組みが参考にされれば幸いである。

謝辞

近代土木遺産である余部鉄橋の保存と継承を検討するにあたり、多くのアイデアをくださった皆様、余部連合自治会をはじめとする余部地区住民の皆様に多大なるご協力を頂きました。付記して厚くお礼を申し上げます。

参考文献

1）余部鉄橋利活用検討会座長川崎雅史：『余部鉄橋の保存と再出発に向けた提言ー鉄橋からはじまる多彩な交流と余部の元気あふれる地域づくりに向けてー』，2007年
2）香美町：『余部鉄橋架替記念事業記念誌　さようなら！　ありがとう！　そして後世へ！　余部鉄橋余部鉄橋の有終を刻む』，2007年